
マーク狩猟記 G

STORM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マーク狩猟記 G

【Nコード】

N2102D

【作者名】

STORM

【あらすじ】

新たな旅へでたマーク。そこで手にした新たな仲間、そして新たな力。それが記された新たな物語である。注・0話は前作のあらすじなので前作を読んでくれた方にはあまり関係ありません。

HUNTING 0 これまでの物語、そしてこれからの物語（前書き）

後書きにこの小説について説明があります。

これは前作を読んでくれた方にも関係があります。

HUNTING 0 これまでの物語、そしてこれからの物語

前作のあらすじ

辺境の村のハンター・マークはモス程度しか狩れなかったゴミである。

しかし、いつも飛竜に挑んでいた（その後確実に死ぬ）彼は珍しくランポスの討伐を受け、何とか達成した（一回死。山菜ジジイが止めを刺す）。

その後劇的な進歩を見せ、シヨウグンギザミ、ティガレックスをひとりで倒すほどまで成長した（ギザミ戦で二回死。レックス戦で目潰しなど残酷なことをする）。

彼はギザミを倒した後、街へ行ったがなかなかメンバーが集まらず途方に暮れていたところである少女と出会う。

彼女の名はティナといい、身分は貴族。

ティナを仲間にしたときに騒ぎを起こし、ナイト内指名手配犯と戦うことになる。

逃げるために戦い、その結果指名手配犯を殺してしまう。

その後ギルドナイトから勧誘、報酬を受ける。

報酬で遊んでいた頃、ティナが火竜にやられてしまう。

敵を討つべく、ついでにティナの治療費を稼ぐべく、火竜に挑む。

その火竜はやたらと強く、マークの剣・アサカリ（アサシンカリンガ）は折られてしまう。

愛剣を失った彼は意識が飛ぶが村長みたいな声を聞き、ギルドからもらった装備の付属品を手にする。

その剣の名はギルドナイトカリンガ。通称ギルカリ。

マークはこの剣を駆使して戦うことになる。

ギルカリの力を試してみたいマークはゲリヨスを狩りにいく。そこで運悪くクシャル・ダオラに遭遇するが何とか生還する（ティナが撃退、マークは崖から転落）。その後カオスと名乗る男が現れ、いきなり決闘を申し込まれる。カオスはある程度力量をはかると戦いをやめ、去ってしまう。

決闘で怪我をしたマークが休んでいると何者かにギルドナイト本部に強制連行される。

成り行きでナイトになったマークは訓練で屈辱を受ける。

頭にきたのでクエストを受けると、またまた頭にくることに運んだ卵から雛が生まれてしまう。

ティナが飼うといい始め、マークの元を離れてしまう。

孤独なマークをみたカオスは彼に手を差し伸べた。

本人はナイトの仕事を手伝って欲しかったのだが、マークに勘違いされ、後々振り回される運命になる。

数カ月後、二人は仕事をしているとティナと再会することになる。

ティナが異常に強くなっていたので力量をはかるために奇面族を狩りにいく。

マークはそこで奇面王をみて、何故かあこがれる。

帰ってからも気になっていたようで再び彼らを探しに行くことに。

探していると弱った蒼火竜を見つけ、戦いを切り抜ける戦友となる。しかし龍操術のやり方がわからないので、龍操術の達人の元を訪れる。

会いに行くと、彼はマークの村の村長だった。

龍操術を教えてくれない上、バカにしてくるのでマークは怒って溶岩竜を狩りにいく。

火山で溶岩竜を探す、代わりに鎧竜と遭遇。

マークはそれでも他の人の力を借りてなんとか討伐。

帰っても村長は龍操術を教える気配がないので諦めて街に帰る。

帰り道謎の宝玉を手にする。

それを手にしたマークは殺戮の龍を降臨させてしまう。

街を滅ぼされ、仲間も失い、やる事がなくなったマークは旅にでる。

これはその旅で出会った新たな人たちとの物語。

そして、後々覚醒するマークの隠された秘密が記された物語である。

HUNTING 0 これまでの物語、そしてこれからの物語（後書き）

マーク狩猟記を再び連載を開始します。

ただ、前作とテーマが違うので違う作品にしました。

前作のテーマは、「成長」を考えて書きました。

今作のテーマは、「夜」です。

マークは夜に力を発揮するようになってしまいました。

新たなキャラクターも登場するので、楽しみにしてください。

相変わらず短いですが。

HUNTING 1 血龍再臨(前書き)

ギャグが無に等しいです。

それでも読んでくれる人にはお礼をいくらいつても足りません。

HUNTING 1 血龍再臨

あれからすでに半年。

マークは旅をしていました。

「今日も村はひとつも見えないか・・・」
マークはあたりが暗くなってきたので野宿することにしました。

マークは空を見上げていると何かが急降下してきました。

「ぎゃあああああああ！！血龍！！！」

マークは急いでその場から離れました。
血龍はマークのいた場所に下りてきました。
マークはしばらく顔を伏せていました。

「・・・襲ってこない・・・？」
マークが恐る恐る目を開けると血龍がおとなしく座っていました。

「血龍、それは自身の宝玉を持つ者の血を求め続ける龍。だが、血

を奪い続けても死ななかつた場合はその血龍はその者を認める」
後ろには山菜ジジイがいました。

「ジジイ!?!」

「良かったの、又シは血龍に認められたぞ」

その瞬間、血龍の宝玉が砕け散りました。

血龍は息絶え、崩れ落ちました。

「血龍は人を認めた時、自らの生涯を終え、散る」

「オレ様の、素材か?」

マークは血龍の甲殻を拾い、空を見上げました。

「そうじゃ。だが、奴の腹の中にある卵はそつとしておけ。すぐに

奴の魂の結晶が現れるじやろう。」

マークは獣の如くはぎ取りました。

「こんなあぶねえ奴、卵のうちに殺す! 止めんな、ジジイ!」

「止めて、古のルールに背くことは!」

振り向くと少女がいました。

「誰だよお前?」

するとジジイが口を挟んできました。

「血龍の魂の結晶じゃ。」

マークはウザいジジイはシカトしていいました。

「ルールってなんだよ! こんな危ねえモンは壊してやるぜ!」

マークはそういつて剣を振り上げました。

その時、マークは吹っ飛んでいました。

「うわあああ!」

マークを吹っ飛ばしたのは少女でした。

「テメエ! なにすんだ!」

マークは叫んでいました。

マークは絶句しました。

「なっ!?!」

少女は細い腕でそれなりの重量のあるマークを難なく吹き飛ばしていました。

感覚は飛竜に突進されたような感覚です。

「あなたなら分かってくれるはず。命の大切さは。龍の命だって人と同じなんだよ。」

マークは剣を納めました。

「感覚が麻痺していたみたいだ。一年程ギルドナイツやってたからな。ハンターの頃は分かってたはずなのにな。」

マークは身を翻し、去っていきました。

「待って下さい!」

少女はマークを追っていった。

二ヶ月後

マークはミナガルデに到着しました。

HUNTING 1 血龍再臨(後書き)

謎な展開ですがそこは目を瞑ってください。感想待っています。
次回の更新は早くて明日になります。遅ければどこまでも……。

HUNTING 2 神秘の怪鳥を斬る男(前書き)

早速新キャラ登場です。

HUNTING 2 神秘の怪鳥を斬る男

ミナガルデに到着後、すぐにクエストを受注しました。

「なんかいいクエストないか？」

「少々お待ちください」

数分後受付嬢が持ち出したクエストは、

『特産キノコを納品せよ！』

『ランポスを狩れ！』

などふざけたものばかりでした。

頭を何度も下げた結果嫌な顔をしながらイヤンクツクのクエストを出してくれました。

『大怪鳥イヤンクツク襲来』、『密林の大怪鳥』など。

その中でも目に止まったのは『神秘の怪鳥』というクエストでした。

「神秘？来てるぜ、オレ様向きのクエストだな！」

「マーク行くんだったら早く行こう」

血龍少女に急がされ、とりあえずそれを受けました。

密林にて

「なあ、イヤンクツクってこんなに小さかったっけ？」

「わたしはみたことないよ？」

「神秘の怪鳥」というクエスト。

確かにそれは神秘でした。

マークと血龍少女はつつたっていました。

大きさが通常よりも遙かに小さかったからです。

「マークより小さい」

「おかしいな、初めて見た奴はオレ様よりでかかったはずだが」

マークは気になったのでギルカリでクチバシをつついてみることにしました。

数分後、マークは口から血を流して倒れていました。

「あんなのに負けたの？ 認めたわたしがバカだった。もちろんあんなの方が遙かにバカだけど」

「奴の破壊力ははかり知れん」

マークは立ち上がると戦法を変えました。

ミニクツクはバカにしたようにくえくと鳴いていました。

「その鳴き声が頭に来る！ ブッコロス！」

マークは石ころを地道に投げ始めました。

1時間後

「飽きたわ」

マークは飽きたので驚異の尻尾を無理矢理切断することにしました。

「ギルカリの切れ味をなめてもらっては困るよ」

マークはニヤつきながら尻尾だけを攻めていきます。

血龍少女は見るのに飽きてアイルーと世間話をしていました。

数分後、驚異の尻尾が切れたのでそのまま虐めているマークでした。

散った怪鳥を見て血龍少女は感想を述べました。

「最低だね」

「勝てばいいんだよ勝てば！」

マークが勝ちにこだわる理由を語っているうちに新手が現れました。

「なあ、イヤンクツクってこんなに黒かったっけ？」

「コイツはクツクじゃねえ、ガルルガだ」

不意に後ろから男の人の声が聞こえました。

崖の上を見ると、太陽のような色をした刀を背負った侍みたいな奴がいました。

「奴は任せろ！」

男は刀を抜き、黒い甲殻に次々と新たな傷を刻んでいきます。

「我が斬陽刀に斬れぬ物なし！」

侍みたいな奴は刀を鞘に納めました。

その瞬間ガルルガの体がバラバラに崩れ落ちました。

「すげー」

「マークより凄いー」

二人の感想は棒読みでした。

HUNTING 2 神秘の怪鳥を斬る男（後書き）

短編でカオスの過去を掲載したのでよろしければどうぞ。

HUNTING 3 全てを斬る魔剣、全てを裂く妖刀

ガルルガが崩れ落ちるのを見て、マークはいきなり叫びました。

「ダレだッ！お前はッ！！」

マークはあの見たことも無いモンスターを見事に倒したその男に嫉妬の念を抱いていました。

「我が名前は坂本 砂塵と申す。わかつての通り、ドンドルマの更に東の国からやってきた」

男は刀を仕舞うと歩きだしました。

「その太刀・・・悔しいけどスゲーな！」
珍しくマークが褒めました。

ギルドナイツ副団長より遙かに強かったからです。

「当たり前だ。我が太刀に斬れぬ物無しだからな！」

マークはそういわれて手に持つ剣を見ました。

砂塵もその剣を眺めました。

「お主のその剣から妖気を感じる。」

「ああ、魔剣ギルド・ナイツ・カリンガだからな！」

マークは剣を天に掲げました。

「この剣に切れないものはないぜ！！」

マークはいいました。

「巨大なモンスターだろうとなんだろうと一撃だ！！」

その言葉で砂塵はマークを睨みました。

「なんなら決着付けてみるか？」

マークは調子に乗って剣を構えました。

「斬陽刀に斬れぬ物はない。その刀、斬り裂いてくれる！」
砂塵は太刀を地面と平行になるように構えました。

強風が吹き、それと同時に二人は襲いかかり……

折れたのは、マークの剣でした。

「勝負あつたな」

「ギルカリ!？」

マークは両断されたギルカリに声をかけました。

「修復は出来る具合に折れている。運がよかつたな」

そういいながら、砂塵は太刀を鞘に納めようとししました。

その瞬間後でグサツという音が聞こえました。

「なっ!？」

砂塵は驚きの声をあげ、黙っていました。

「鏢が鞘に納まってよかつたな。だけどよ、」

マークは一旦言葉を切りました。

「刃が折れちゃ、斬れねえよな!」

斬陽刀が折れていました。

「ギルカ리를修復しに行く。お前も行くか？」
マークは砂塵に尋ねました。
「我も斬陽刀を直さねば先に進めぬ。ついていくことにしよう」

数時間後

「ここが街か」
「オレ様はギルドに行く。工房はここを右手に行くところ」
「わかった機会があればまた会おう」
二人は別れを告げ、別の道を歩き始めました。

「マーク、ギルドナイトが見てる」
少女の警告を聞き、あたりを見渡すとざっと10人のナイトに囲ま
れていました。
「まずいな、ギルカ리를直してもらおうとした相手に襲われるとは」
「
マークは折れた剣を構えました。」

HUNTING 3 全てを斬る魔剣、全てを裂く妖刀（後書き）

今日、MHF「シーズン2・0 エスピナス、覚醒」のプレビューサイトが公開されました。

「エスピナスカッコよくな〜」というメールをMH関連の友達全てに送りました。

どんな攻撃をするのでしょうか？
今から楽しみです。

HUNTING 4 長官の罠

「まあ待て！オレ様は無駄な血は出したくない。マークは精一杯強がっていました。」

そこへギルドナイツの一人が出てきて、

「その武器と防具を返却していただく。」

その男はマークを指さしていました。

「イヤだね！！これはオレの剣と装備だ！」

その言葉に何人かのギルドナイツが動きました。

ギルカりは刃の中程で折れていたのである程度は使えました。

しかし、ナイツ10人对元ナイツ1人、しかもマークは下っ端。彼の方が圧倒的に不利です。

「さあ、困った。ここにカオスがいたら勝てるんだが」

マークは左手に投降用ナイフを握ると彼らに投げつけました。

ナイツたちは華麗に避けて突っ込んできました。

「待て、こいつを殺すな！」

何者かに呼び止められ、ナイツは剣を仕舞いました。

「運が良かったな」

ナイツのひとりそう呟いて本部へ戻っていきました。

マークも折れた剣を腰に固定し、本部へ足を進めました。

「君がマーク君だね？」

「そうだが、手荒い歓迎されるようなことをした覚えはないぞ」
いかにも長官って感じの奴がいたのでとりあえず話しました。

「本題だが、我が息子のカオスの救出に向かつてほしい。場所は砂漠・・・といつてもドンドルマ近辺では使われない砂漠だが。何やらディアブロスがいるそうだ。まあ、息子もハンターもナイトもやつてたから死んでないだろうが最近顔を見てないんでね」
長官らしき人は長々と説明した。

「息子さんのカオスねえ・・・つてカオスかよっ!？」

マークは死んだと思った友の名を聞いて驚きました。

「じゃあよろしく頼むよ。」

マークはそう言われました。

「まだいいなんて言つてねえだろ!!」

マークは叫びました。

すると周りにいたナイト達が少し動きマークを威嚇しました。

それを見たマークはいいいました。

「わかった。いくよ・・・。」

あきらめました。

HUNTING 5 三千世界無双刀

「地図見てもどこに奴がいるのかわからねえ」

マークは地図を片手に歩いていました。

丁度エリア10に差し掛かったとき、大地が揺れました。

「ななななな、なんだ!？」

マークが叫ぶと手前の方から黒い角竜が出てきました。

「マジかよ、黒か・・・」

黒い角竜は一言で

悪魔です。

「てかギルカリも折れてるし・・・どうしようか」

マークは迫り来る悪魔から逃げながら洞穴に逃げ込みました。

洞穴を抜けるとそこは猫の集落でした。

「ニャー、誰ニャ?」

「天下一のハンター、マーク様だ」

それだけ聞いという猫はガラクタを漁っていました。

五分後

マークは集落で剣をいじっていました。

「ギルカリ直んねえかなあ」

マークは疲れて横になりました。

「大丈夫ですか？」

マークが目を覚ますとそこには太刀を背負った女性がいました。

「大丈夫みたいだね。あたしはライム。ところでカオスっていうハ
ンター知らない？」

「・・・ああ、カオスか。奴はこの砂漠に来てるっぽい」

「本当！？それじゃ探しにくいこう！」

外に出るとまた黒い悪魔がいました。

「ここはあたしに任せて、いくよ、三千世界無双刀！」

彼女は刀を抜くと悪魔に向かって横に薙ぎました。

次の瞬間、角竜は足と胴体が分かれていました。

「す・・・スゲえなんだあの剣は！！」

マークは崩れ落ちる黒い悪魔を見ながら呟きました。

「三千世界無双刀・・・欲しい・・・ギルカリより百万倍は強そう
だな！！」

マークは一人で興奮していました。

しばらくしてライムがマークのほうにもどってきました。

ちょうど戻ってきたときでした。

「・・・誰？」

ディアブロスの死体があるあたりから物音が聞こえました。
ライムは刀を抜くと横目で音がした方を見ました。

「・・・さて、落ち着け」

骸布を被った人がでてきました。

鎌威太刀を持たせたらまるで死神です。

しかし背には鎌威太刀ではなく、大剣がありました。

「刀を納めないなら・・・ダークナイトブレイドの鎧にする」

死神っぽい奴は大剣を構えました。

刀身にはDark Night bladeと彫られていましたが、
マークは鮮明にその剣を覚えていました。

マークは死神を指し、叫びました。

「オレ様だ、思い出せっ、カオス!!!」

「・・・マーク？」

死神は剣を納め、骸布を取り始めました。
確かに、中にいたのはカオスでした。

「カオスっ!!」

ライムがそう言って走り出しました。

「居心地わりいな」

マークは非常に苛立っていました。
何故なら帰り道、カオスとライムが嫌になるほどくつついていたからでした。

ギルドに戻ると長官らしき人がにこやかに笑って待っていました。
ニヤニヤしながらマークに剣を渡して長官は凄い速さでカオスのところにいききました。

「あいつ親バカだ。絶対に」

マークが受け取った剣にはこう彫られていました。

M a l l i c i o u s n i g h t k a l l i n g a と。

HUNTING 5 三千世界無双刀（後書き）

実際に（太刀が）あそこまで強くないですが、使用者の腕がよかったですと思ってください

HUNTING 6 幻影

「マリシヤス・ナイト・カリンガ？」

マークにはマリシヤスの意味が理解できませんでした。

「あー、もう何で武器の名前って長いんだ！これも略してやる！アサカリ、ギルカリ、ときたらマリカリと思うだろうがここはあえてマナカリで」

マークはマナカリを腰につけて、切れ味を試す如くクエストを受けました。

「なんかねえかなあ・・・これだっ！」

マークはクエストを受けて走り去っていきました。

旧沼地

「ここに赤いフルフルがいるらしいな・・・」

マークは右手に盾を左手にマナカリを構え、フルフルを探しました。しかし、マークはここにきて重要なことを思い出しました。

「・・・フルフルって、どんな奴だ？」

マークはフルフルの存在がよくわからないまま、洞窟の外にでました。

「何アレ、グロテスクすぎる!？」

マークはその赤い肉の塊を見て背筋に寒気を感じました。剣を構えたまま動けませんでした。

すると、どこからか声が聞こえてきました。

「ニヤ！赤いフルフルニヤ！唇いたたくニヤ！」

声の正体は猫でした。

声を聞いたフルフルは猫の方を見て、なんかをタメ始めました。

「ニヤ、俺様をなめて貰っちゃ困るニヤ！」

猫は両手で一部が紫がかつたナタを構えていました。

「まさか・・・あの剣は伝説の!？」

マークはある伝承を思い出しました。

《奇面族はもとより奇面王もかなう者はいない・・・》

「食らうニヤ！奇剣チャチャブー！」

猫は一太刀でフルフルの首を切り落としました。

「てか、どっから首だよ」

首を拾ったアイルーはこちらを向きました。

「あんた、もしかしてコイツ狩りに来たかニヤ？」

マークは頷きました。

「よよよくそんなグロいもの触れるな・・・」
マークは気持ち悪さにおびえが入っていました。

「あなたよりはマシニャ。で、素材がほしいのかニャ？唇以外は全部やるニャ」

猫はそう言って立ち去りました。

マークはそこで分かりました。

「長靴を履いた猫!？」

長靴を履いた猫とは世界唯一のアイルーハンター。

強さはG級ハンターの折り紙付きのこと。

しかし、彼が唇を何に使うのかはマークにはわかりませんでした。

グロテスクな擬態をした物体からはぎ取り始めましたが中はキモイので表面の皮だけはぎ取りました。

はぎ取るのにやたらと時間がかかったので夜になっていました。

「薄気味わりいな・・・」

帰り道、ケルビが沢山いるところにでました。

ケルビを眺めながら歩いていると白い影が舞い込んできました。

「・・・なんだ!？」

一言で言えば、

ドスケルビ

が、道の反対からでてきました。

HUNTING 7 悪意を持つ魔剣

「ななな・・・あれはまさか・・・!!」

マークは落ち着きをなくして言いました。

「千年に一度しか現れないと噂の伝説の白ケルビ!?」
ドスケルビはしばらく歩いて止まりました。

「まだオレ様には気づいてないみたいだな・・・。」
そしてマークは言いました。

「アレを倒せば・・・オレは伝説のハンターに!!」
剣をそつと抜き、物陰に隠れました。

「うひゃひゃひゃひゃ!!」こつから飛び出して首切ればオレ様は
伝説のハンターだぜ!!」

と、マークは小声でいいました。

白ケルビが近づく毎に緊張は高まっています。

マークは後少しのところでゴクリと唾を飲み込みました。

その瞬間、白ケルビは目付きを変え、こちらを向きました。

「何故バレた!?!」

マークは凄く速さで逃げだし、別のエリアに逃げ込みました。

マークは草むらに倒れ込んでいました。

「・・・なんだあいつは!?!」

マークは逃げながら、さらにたった一瞬ですが確かに見ました。
蒼い雷いかずちを落としている白ケルビの姿を。

マークは思いました。

「こりゃあ本格的に死ぬかもしれねえ」
多少のおびえがあったものの、彼は剣を握り直して再び大地に立ちました。

その姿はいつも以上に凜々しかったのですが元の顔がアレなので顔はいつもよりグロテスクに見えました。

草むらを抜けると白ケルビがいました。

洞察力がいいようですぐにマークの方に向かってきます。

「来たな・・・今こそマナカリの真の力を解放するときだ！」

マークは手にしている漆黒の剣を横に振ると月の光が剣にぶつかり、青白く光り始めました。

月の光がそれでも剣の輝きは消えませんでした。

白ケルビはその輝きに恐れをなし、マークから離れていきました。

「逃がすか・・・マカオ・スレイヤー!!」

マークは剣を白ケルビに向かって投げました。

剣は空に蒼い足跡を残して命を奪い去りました。

投げるまでマークの眼は蒼く、悪意に満ちていましたが、投げ終わるといつもの黒い眼に戻って倒れ込みました。

HUNTING 8 死刻夜刀

意識が戻ってくると馬車に乗っている様でした。

「マーク、大丈夫か？」

「うう・・・何が起きたんだ？」

マークは起きあがると声をかけてくれた人を見ました。

「砂塵！？」

以前会った東方の太刀使いの砂塵が目の前にいました。

マークが折った太刀はすっかり元通り、その上強化されていました。

「太刀直ってんじゃん！カッコよくなってるし！斬陽刀がこんなに！」

「・・・斬陽刀の名は捨てた。色が変わっただろう」

確かに以前は赤系の色だったのが青系の色になっていました。

「この太刀の名は、死刻夜刀しこくよがたなと名づけた」

マナカリと対になるような名の刀でした。

マークが太刀をじっくりと眺めているので砂塵は刀について説明し始めました。

「死刻夜刀は、名刀というより妖刀なんだ。昼に斬っても斬陽刀と変わりはないが、夜に斬ると切り口が徐々に変色していくんだ。それもかなりの速さで。そこから身体が徐々に死滅していく。最初は驚いたよ」

マークは夜にすごい力を発揮するということ思い出しました。

「そういえばオレ様のマリシヤス・ナイト・カリング・・・通称マナカリがすごい力を発揮したのも夜だったな」

マークは剣を抜いてよく確かめました。

「この剣、研究してもらおうか・・・」

街に着くと二人は国王に剣と刀の研究をしてもらったため、王宮に足を運びました。

「おい、国王！ちょっと助けてくれー！」

その声を聞きつけ騎士が大勢集まってきました。

「無礼者、何を言っている！」

騎士の一人がマークに言いました。

「オレ様は国王に用があるんだ。オマエらなんか用はねえ！」

マークは馬鹿にした口調で言いました。

「戦闘体制に入れ。生きて返すな！」

騎士は剣を抜き、二人を包囲しました。

「馬鹿者、あんなこと言わなければこんなことになってない！」

「砂塵、オレ様にはとっておきがあるんだ。それより早くコイツら

倒して国王に会わなきゃな！」

マークは短剣を二本抜き、砂塵は脇差を構えて戦闘体制に入りました。

騎士は強くなったマークの前では思ったより無力でした。

「ふはははははは、新生マーク様の敵ではないわ！」

新生になったのは随分昔ですが。

思えばランポス討伐以来、急激に進歩しました。

以前は順番間違えてアプトノスから飛竜と戦っていたマークでした。

「ふっ、華麗すぎるぜ」

マークは気持ち悪い顔で呟くと短剣を大げさに振り回してから仕舞いました。

後ろを向くと砂塵が騎士の山の上で胡座をかいていました。

「対人専門の武士、更に名門の家に生まれた俺に勝とうとは100年早い」

山から降りた砂塵は騎士にそう投げ掛けていました。

HUNTING 9 王宮反乱

王宮に踏み入れた二人は応接室を探しました。城は意外と広く、迷いました。

「処刑所・・・はははは」

たどり着いたところは処刑所とかかれた部屋でした。

「人の足音だ・・・」

「しかたねえ、処刑所に逃げるぞ」

マークたちは処刑所に入りました。

部屋には誰かいました。

というか、

死刑執行中でした。

「助けてくれええ！」

死刑囚がなんか騒いでいました。

「うるせえなあ、あら、国王じゃん」

国王が死刑にされていました。

「マーク、確か国王に用があるんだよな」

砂塵は兵をの数を見て脇差を抜きました。

マークも短剣を抜くと飛び出しました。

「死ねえい死ねえいうひゃひゃひゃひゃ！」

マークが高笑いしながら首に剣を刺しています。

「深龍斬・孤！」

砂塵は故郷で習得した剣技を華麗に駆使しています。

ちなみに深龍斬は、

孤・迅・月・骸・猛・割・燕・朧・剋・羅・真・霸・塵・皇・核・
魁・帝・界・流・淵・天・煌・神・聖

と、計24種あるそうです。

左から順に強くなっています。

最後の兵を倒したとき、マークはいいました。

「無事か、国王。もとい・・・オレ様の兄よ」

「マークが・・・王族!？」

砂塵は驚いた顔でマークを見ました。

「ありえなっ!!!」

砂塵は追撃を加えました。

「いや、マークは王族ではない。私の父が養子として引き取ったがすぐ死んだ。母は前からマークが好きではなかったらしくその後捨てられたがな」

「そしてオレ様はハンターになるうとしてポーン村にたどり着いた。まあいい。兄貴、研究してもらいたいものがある。見てくれ」

マークはマナカリと死刻夜刀を差し出しました。

「この剣を？分かった。一週間したら来てくれ。それまで剣を預けておこう」

いかにも普通の騎士剣をもらいました。

夜

「エクスカリバーじゃねえのかよ」

「草薙ノ剣でもないな」

国王のくれた剣に散々文句をいった後、寝ました。

一週間後

研究室に向かうと劍が嚴重に保管されていました。

「あなたがたがマーク様と砂塵様ですね。研究長のマイルです」
研究長に挨拶をされ、砂塵も礼をします。

マークは研究室の飛竜の剥製とかを見てました。

「さて、砂塵様ですが単刀直入に聞きます。あなたは劍技に禁じられた技などありますか？」

「禁龍劍のことか？それなら深龍劍の他に25種ある。さらに深龍劍にも隠された技があるとか。だが強すぎて刀の方が耐えれない」
砂塵は疑問を持ったような顔でマイルに聞きました。

「そうですね。死刻夜刀でしたっけ、これは龍刀【朧火】よりも遙かに強度があります。もしかしたらその技に耐えられるかもしれませ
ん」

砂塵は太刀を受け取ると広いホールで巻物を広げ始めました。

そこには深龍劍・孤から聖まで、さらに禁龍劍の技が全て書かれていました。

「斬る……」

後ろを向き、角竜の剥製に目をやると刀を抜きました。

「禁龍剣・・・鳴めい!!」

雷鳴が轟き、剥製を焦がしました。

刀を見ても傷は見あたりません。

「・・・強い・・・」

砂塵はその強さに絶句していました。

「鳴でこの威力・・・」

「どうした？」

遊んでたマークがようやくやってきて聞きました。

「禁龍剣の雷の剣技最弱の技なのに・・・」

砂塵が指す方向を見ると角竜の黒焼きがありました。

さすがのマークでも声がでませんでした。

二人は研究室を後にしました。

ちなみにマークは身体能力が常人（より少し上？）なので超強い技は習得できませんでした。

街に戻ると血龍の少女が走ってきてマークにハイキックを見舞いました。

「なんだかんだで2週間も放置しといて何やってんだバカ、クズ、

「ゴミー！」

凄いやわれようですがマークは可愛いと思ったので許しました。
それと同時に砂塵はマークがロリコンだということに気がつきまし
た。

HUNTING 11 しじまの向こう

数日後

マークはマナカリの強さで自分が強くなるか試してみることになりました。

「超強い奴頼む」

受付に頼むと不満そうな顔を向けられました。

その後、頑張つてクエストを受けさせてもらいました。何を受けたのかはわかりません。

森と丘

「いねえ！飛竜どころかランポスすらいねえ！」

軽く三時間は探していますが無見あたりません。

やる気を無くして寝ると、後ろの方に何かいました。

「確かにいたよな・・・？」

何かを探しにいても何もありませんでした。

日が暮れて、夜になりました。
未だに何も見つかりません。

「マジどこだよ、帰ろうかな」

マークは完全にやる気を無くしていました。

結局疲れたので帰ることにしました。

「腹減ったなあ・・・携帯食料つと」

マークが携帯食料を取り出すとその瞬間、手にあつた食料が消えま
した。

「あれ？」

マークはメラルーを必死に探しましたがいません。

視線を下に向けて歩いていると何かにぶつかりました。

「いてえな、こいつ・・・カメレオン!？」

紫色の巨大カメレオンがマークを見おろしていました。

数秒経つてマークはそれが飛竜だと言うことに気がつきました。

「ようやく見つけたぞ!」

マークはマナカリでスパスパ斬りつけていきますが、皮膚が弾力を
持っているので上手く斬れません。

少し経つと動じなかったカメレオンは尻尾を地面にたたきつけ始め
ました。

その風圧は、龍の風の如き力を持っていました。

マークは無抵抗のまま吹き飛ばされて木に激突しました。

「こいつは・・・古龍だ・・・」

マークにはカメレオンが古龍なのに納得がいきませんでした。

HUNTING 12 シリウス

「ハッ、所詮カメレオンだろ？外敵におびえてハエでも食ってりやいい！」

マークはバカにした口調で斬りに行きました。

「死ねえい、貴様の角、折ったるわ！」

マークはカメレオンとの距離を縮めました。

後少しと言ったところでカメレオンが姿勢を低くしました。

「怖じ気づいたか、今更無駄だ！」

マークが大きく振りかぶったその瞬間、

カメレオンが消えました。

「何い！？」

気配も消えました。

マークは目を丸くして辺りを見渡すと、後ろにカメレオンが。

奴の言うがまま、謎の液体にかかってしまいました。

「なんだこれ・・・力がはいらねえ」

マークは不自由になった体を引きずりながら立ち上がりました。

「カメレオンが消えた・・・」

「どこだ!！」

マークはかれこれ十分くらい叫び続けていますが居ません。

疲れて、丘に倒れ込み、空の星を見上げました。

「腹減ったなあ」

食料は気づいたら全て無くなっていました。

空腹を紛らわすために野草を探しに行きました。

「元氣ドリンクってどうやってつくるんだっけか・・・」

最後の頼みも作り方を忘れ、マークは絶望的でした。

途方に暮れて歩いていると、瓶がひとつ飛んできました。

「それ、飲んでいいよ」

マークは上を向くと少し高くなった丘に座っている少年を見つけました。

「それ、元氣ドリンク。今日は何故か草食竜がないから作ったんだ」

マークは手にとると一気に飲み干しました。

「生き返った!礼を言う!」

「気にしなくていいよ。困ったときはお互い様さ」

少年は立ち上がると外していた籠手を装着しました。

「さて、君は街から着たんだね。ボクはココット村から来たんだ。ハンターなら聞いたことはあるよね」

マークはハンターの聖地・ココット村を全く知りませんでした。

「知らないならそれでいいけど。来た目的は同じだろ？なら一緒にいこう」

少年は手を差し伸べてきました。

「ボクはシリウス。ガンナーだよ」

「オレ様はマークだ。神とよんでもいいぞ」

「ははは！ま、いいや。いこう」

軽く笑われてスルーされました。

シリウスと歩いて約五分。

「そこかっ！」

シリウスは何もないところに弾丸を放ちました。

何かが悲鳴を上げ、倒れました。

「ななななに！？」

何もなかったところからカメレオンが現れました。

マークは剣を抜き、叫びました。

「クソカメレオン！さっきはよくもやってくれたなあ！！」

マークは月光を剣に当てました。

「アブソリユート・カリンガ！」

マークは光る現象をアブソリユート・カリンガと名付けたようです。

マークにしてはまともな名前です。

ちなみにアブソリユートは絶対とか、そんな意味です。Y A H O O

辞書で調べたのでたぶんOK。

マークの眼とマナカリが蒼くなり、いつものバカらしい雰囲気は消え去りました。

「・・・終わらせる・・・」

剣を投げつけ、剣はその先のカメレオンの眼をとらえました。謎めいた声が聞こえ、カメレオンは地に伏せました。

「・・・ひっ、こ、古龍が、一撃!??」

シリウスは非常に驚いていたようで、腰を抜かしていました。「決まったぜ」

マークはいつもの様に剣を空に掲げてカッコつけていました。

HUNTING 13 勧誘

カメレオンの遺体はココット村に運び込まれました。

「何だこのド田舎」

正直に言いますとポーン村の方がド田舎です。

シリウスのオプシオンとして付いてきたマークはやる気無しに酒を飲んでいました。

なんか、やる気無い人と意気投合していました。

「本当に、ココットに生まれたらハンターになるしか無くてよ」

「分かるぜ、その気持ち。オレ様も変な村に捨てられてハンターになっただんだ」

涙を流して抱き合う二人をみて、キモイと思わなかった人は神だといわれるほどキモイ光景でした。

シリウスは村長と話していました。

「誰じゃ、あの見るだけで不快になるアレは」

「マークと言ったかな？ ナズチを一発で倒してた。あの剣、なんか普通と違う」

シリウスは鎧を脱ぎながら言いました。

「それはともかく、鎧の中は見せてないじゃろうな？」

「素肌は見せることなんて無かったよ、でもなんで他の人に見せちゃいけないの？」

鎧を脱いだシリウスはとても美しい体型をしていました。

つまりシリウスは、女でした。

「又シは体が特殊だからじゃ」

「どうやら、村長は騙しているようでした。」

「当の本人は自分が女だと意識していないようでした。」

マークは起きると頭にもものすごい痛みを感じました。

「勿論、酒の影響です。」

「いてえなあ・・・ん、シリウスだ」

シリウスはお茶を飲みながら空を眺めていました。

マークはシリウスを眺めているうちに彼の強さを思い出しました。

「あいつはオレ様のパーティー初のガンナーになってくれるかもしれない！」

マークはそう思うと彼の元に駆けていきました。

「え、ボクが街に？そこまで強くないよ」

シリウスは笑いながら答えました。

「おまえもハンターなら、もっと強い飛竜と戦いたいだろ？」

マークは自分の欲望のためだけに説得を試みます。

「確かにまだグラビモスとかと戦ったことないし・・・」

「オレ様はあるぞ！奴は強かった。だが、オレ様は奴を征した！ひとりで！」

嘘を強調する癖がでて「ひとりで！」が他の二倍くらいの大きさに聞こえました。

シリウスは変な顔をして「嘘っばいなあ」と言っていました。

HUNTING 14 魂の雄叫び

「その銃。それだってもっと強くなるんだ。更なる高みを目指してみないか？」

「・・・足手まといにならない？」

ひとつ言っておきますと、昼はマークの方が遙かに足手まといです。

「ああ、おまえならできる！」

シリウスは俯いて言いました。

「村長から許可がでたら行くよ」

「はあ！？何でこいつ連れてっちゃダメなんだよ！？」

「シリウスはワシの跡取りになるんじゃない！」

マークと村長は互いに睨みながらものすごい気迫で戦っています。眼だけで。

「大変だ！蒼火竜があらわれた！」

マークは振り向いて、ニヤニヤしました。

「ふはははははは！オレ様が蒼火竜を狩ってくる！狩れたらシリウスは連れていくからな！行くぞ、シリウス！」

マカオは彼の手をとると凄い速さで走り始めました。

連れていかれるシリウスは慌てながら「ねえ、ボクに決定権はないの？」と連呼していました。

森と丘には凄惨な蒼火竜がいました。背に、ランスが刺さっている蒼火竜でした。奴に痛みはないようで結構普通に立っていました。空の王者というより、空の騎士王といった方が彼にはふさわしいでしょう。

「なななななんだあいつはっ!？」

マークはビビっていました。

火竜は空に飛び立つとこちらまでやってきました。

「マジかよ、死ぬし！」

マークは怖じ気づいて逃げようとするするとマークの目の前に火竜が降りてきました。

「シリウス、助け……」

シリウスは既に逃げていました。

ジリジリと追いつめられていくマークは焦りと死の訪れを感じていました。

「……こんなときソウルがいたらなあ」

マークは大分前に失踪した己の蒼火竜を思い出していました。

蒼火竜は追いつめてはきますが一向に襲ってきません。

それどころか翼を広げ、マークを招いているようでした。

「あら、もしかしてソウルですかい？」

マークが間拔けた声を出すと火竜は空高く吼え、喜んでいました。

ただ、至近距離で吼えられるのは耳に悪いですが被害者がマークなのでよしとしましょう。

HUNTING 15 登録(前書き)

最近サブタイトルを考えるのがつらくなってきました。

マークは火竜の背に乗り、シリウスを探しました。

シリウスはエリア4にいました。

「シリウス、迎えにきたぜ！」

マークはソウルの背から飛び降りました。

「ぐはっ！」

高度が高かったらしくマークは負傷しました。

「マークっ!？」

シリウスが心配そうな目でみてきます。

「こ、これくらいいたしたことねえぜ！」

しかしマークの右の中指は変な方向に曲がっていました。

「絶対大丈夫じゃないよ!？」

シリウスがマークの指を曲げて元に戻すとマークの悲鳴とバキィイ

イイという鈍い音が響きました。

「だらしのないなあ、それでもハンターなの?」

シリウスにバカにされまくっていますが本人には届いていないようでした。

痛みが引くとシリウスをソウルの上に乗せました。

「ここに怖っ！」

怖がるシリウスと共に村・・・ではなく街へ向かいました。

ミナガルデ

「凄い！ここが街？」

シリウスは超興奮して見回りました。

「ガキだなあ」

あなたが一番ガキですよ、マークさん。

そうこうしているうちに日が暮れたのでハンター登録をしにいきました。

「お、マーク。帰ってきたか」

酒を飲んでいる砂塵がいました。

「砂塵、試し斬りになに斬ったんだ？」

「轟竜を1頭程。まだイカズチの禁龍剣しか修得していないのでな。

マークは？」

「オレ様は巨大カメレオン狩ってきたぜ！」

砂塵は分からないように首を傾げます。

「オオナズチまたは霞龍っていうんだよ」

シリウスが呆れ気味に言うと砂塵が納得したような顔をしました。

「あ、そうだ。シリウス、コイツは砂塵って言うんだ」

マークが思い出したように紹介を始めました。

「砂塵だ。太刀を使っている」

「えっと、シリウスです。ガンナーです」
自己紹介が終わった頃、マークが登録の紙を持ってきました。
シリウスはさらっと書いて出しに行くとカードをもらって帰ってきました。

シリウスはココット村で実績があるのでかなり高いランクから始めることができました。

「なになに、HR30かあ。なにい!？」

マークはHR27でした。

ちなみに砂塵はHR43です。

HUNTING 15 登録(後書き)

HUNTING 16 平凡な一時(前書き)

正直意味わからん話です。

三人は適当に酒を飲んで眠くなったので部屋に戻ることにしました。

「シリウス・・・だったか、このクズは寝てるから部屋に戻るう」
マカオは既に寝ていました。

「はい、ボクももう寝ます」

二人は立ち上がりマークをおいて部屋に戻りました。

廊下

「おまえ大丈夫か？肩なら貸すが」

シリウスがあまりにもふらふら歩くので心配になり、砂塵は声をかけました。

「大丈夫です・・・うわっ！」

返答をした瞬間後ろから転びました。

シリウスが倒れる瞬間に砂塵が支えたので頭はぶつけなくて済みました。

その結果砂塵とシリウスは見つめあう形になりました。

そのまま2分程固まったままでした。

「あ、ありがとうございます」

「し、しっかりしろよな。あのクズよりいいハンターなんだから」

シリウスはこの後すぐに部屋についたので走って入りました。ふらふらしながら。

シリウスの部屋

「・・・ヤバい、かなりドキドキしてる・・・あの人好きになったのか？でも男の人だし、もしかしてボクって・・・」

再び廊下

「何考えてんだ俺、あいつは男だぞ、好きになるはずがない。俺は同性愛者ではない！」

どうやらお互い好きになったようでした。

翌日

「・・・死ねクズとつとと起きろ」

マークは受付嬢にたたき起こされました。

脳が覚醒するまで1時間と無駄に長い時間を費やし、立ち上がりま

した。

「あいつらに置いていかれた・・・」

誰も居ない酒場でひとりで呟いていた光景のおかげで受付嬢に変なイメージを持たれました。

マークがうなづけていると血龍少女が来ました。

「何やってんの？」

「砂塵たちが居ない！」

マークが暴れているとシリウスがやってきました。

「うるさいよ、少し黙れよ」

シリウスにまで言われました。

マークが殴りかかろうとすると額に銃口が当てられました。

「シリウス！止める、クズでも存在することは権利はあるんだ！」

砂塵がやってきて言いました。

シリウスは銃を離すと「撃つつもりはなかったですけど」と呟いて離れていきました。

HUNTING 17 頂点へ

「砂塵！さりげなくクズっていうんじゃないか！」

「ああ。シリウス、クエストに行こうか」

「さ、砂塵さん、何狩りにいきますか？」

マークの言葉は適当にスルーされました。

正直無視されるより悲しいのが現状です。

「街のクエストってどんなのかな？」

「村と殆ど変わらない。ただ、飛竜が強くなっているな」

マークには話に入る隙間がないです。

「最近オレ様シカトされまくりだな・・・いや・・・ひとりで行く・・・」

二人の中に入れそうになかったので、ひとりでクエストを受けることにしました。

「ん？なんだ、このクエストは？」

そこには

<起源にして、頂点>

というクエストがありました。

「オレ様を差し置いて頂点だと？ハッ、笑わせる！」

マークはHRが足りないにも関わらず、ギルドマスターを脅してクエストに出発しました。

決戦場

「オレ様に狩れない飛竜はない！さあ、来い！カカムテルムルとかいう奴！」

滅茶苦茶になっていますが本人の中ではアカムトルムです。

数分経つと遠くからなんかがでてきました。

出てくると同時に奴は走り出しました。しかしとても遅いです。

「ふははははは、やられにきたか・・・はははは、でけえ」

マークは巨大ななんかに軽く押しつぶされました。

「なんだあの重さは！？」

マークはキャンプの名付けられた何もない平地に横たわっていました。

突進されたとき、ヤバい質量がぶつかってきたために全身の骨が砕けました。

明らかに頭蓋骨が破壊された感覚があったにも関わらず、元に戻っています。

死ぬのは何度もありましたがこんな残酷な殺し方はギザミの首切断以来です。

気を取り直してでかいタケノコを装着したトゲの塊に向けて剣を向けました。

「マリシヤスの意味・・・とくと味わうがいい・・・アブソリユート・カリンガ！」

最近頻繁に使うあれですが使いすぎるとおもしろくないです。使うとギャグが消えるので。

ズタボロになったマークはマナカリを杖にして歩いていました。

「やる気失せるし・・・」

外にでるとやはりトゲトゲしい黒い物質がいました。

「さあ、今度は真面目にやるぞ!」

今度はつてかもう後がないマークでした。

覇竜はマークを見ると立ち上がり、ものすごい声量で吼えました。

「ぐふっ!」

マークは腹を押さえ、血を吐き出しました。

口から血を流しながら「轟竜より強力だぜ」と力無くいいました。

覇竜は、普通なら吹き飛ばされてしまう威力なのに平然ではないけど立っているマークを見ながら、地に腕をつきました。

「今度は・・・そう簡単に負けない!究極のハンター・マークの名にかけて!」

剣を横に振り、覇竜を睨みました。

「オレ様は貴様を・・・倒す」

目だけは本気でしたが、全身ボロボロなマークの姿は非常に笑えませぬ。

しかし、顔は真剣そのものです。

「殺す殺す殺す殺すっ!」

マークは吼えながら切りかかりにいけますが倒れる気配はありません。

「なんで死なねえんだ!」

マークは一心不乱に剣を振り続けます。

「そんな斬りかたじゃ倒れねえよ」

何者かが話しかけてきました。

マークは後ろを向きましたが誰もいません。

その瞬間覇竜の悲鳴が聞こえ、再び覇竜を見るとハンマーを背負った男が覇竜を気絶させてつぶやきました。

「気絶回復まで残り約15秒・・・それでケリをつける」
ハンマーは牙を易々と砕き、頭を変形させていきます。

「この世の生き物なんて全てがクズだ、死ねよおら、死ね！」
卑劣な言葉を浴びさせられながら覇竜は動かなくなりました。
たった12秒の出来事でした。

HUNTING 19 双鎗(前書き)

あけましておめでとごうございます
今年もよろしく願います

ハンマーを持った男は振り返り、マークを見ました。

マークは気づきませんでした。巨鎚を二つもっていました。

その双巨鎚で殴られた覇竜の頭は原型を止めていない以前にありませんでした。

「クズだな、あんな奴に苦戦するとはな！」

男はハンマーを背負うと見下したような声でいいました。

「オレと、あいつ以外は全てクズなんだよ、この世の生き物は！」

マークはそう言われて腹が立ちました。

しかしマークは元からクズなので誰も気にしませんでした。

マークがなんかぶつぶつ言うので男はイライラしているマークの顔をのぞくといいました。

「ははっお前マークか！噂通りの弱さとキモイ顔だな！」

男はどこまでもバカにし続けます。

マークの剣を握る力が強まっています。

「何、そんなに死にたいのか？ゴミの分際で。オレは殺すと決めたら本気で殺すぜ？」

男はナイフを一本取り出しました。

マークはキレて、剣を対人のときの構えにします。

「はあ？オレ様に勝てる奴なんていねえよ」

「弱さではなあ、ははははは！」

男は高笑いしています。

マークは卑怯なので隙について斬りかかりました。

しかし剣はあっさりと弾きとばされました。

「お前の剣はナイフに弾かれるほど切れ味悪いのか？」

男がナイフをマークの首に当てていいました。

「見る度殺してえッラしてんなあ、殺すか」

男がナイフを横に引こうとしたときでした。

銃声が聞こえ、マークの首からナイフは離れ、聞き覚えのある声か。

「マークから離れろっ！」

そこには救世主の如く、シリウスがいました。

「待たせたな、マーク」

砂塵もいました。さらに、

「手間かけさせやがって。まあ、シゴトだしな」

「後は任せて、マーク」

カオスとライムもいました。

「みんな・・・」

マークは涙を流し始めました。

「キモッ！」「」「」「」

敵味方問わず引いていました。

「で、オレに何のようだ？」

男はナイフを納めていました。

「G級指名手配犯・マックス。分からないのか」

カオスは静かにいいました。マックスと呼ばれた男は呆れた顔をして

「オレは幼竜も人も殺したことはない。今殺そうとしたけど」

「そうだったのか、ギルドは何ガセネタ流してるんだか。あ、マークのことは気にするな、いらなから」

カオスは頭を抱えてそういいました。

街に戻るとカオスがマークをギルドにつれていきました。

「マーク、逮捕完了です」

「ちょ、おい！何やってんだ！」

マークは一生懸命訴えましたが牢屋に閉じこめられました。

「マーク、貴様はHRを無視して覇竜を狩りにいった罪で10日間監禁する」

カオスはそう言って壁によりかかりました。

「マーク、気にするな。すぐでれる」

砂塵が励ましますが意識が飛んでました。

酒場

「マーク捕まったね」

「奴もこれで少しこりればいいんだが」

シリウスと砂塵は二人で酒を飲んでいました。
マーク異常さを話題にして。

数時間後

「やあ、二人とも」

少し酔った二人に通りがかったライムが話しかけました。

「あ、ライムさん。どうしたんですか？」

「たまたま通りかかったただけけど・・・まあいいや。さっき聞いた話なんだけど雪山の近くの・・・ポツケ村だっけ？にとんでもないハンターがいるらしいよ」

それからはそのとんでもないハンターの話題になりました。

約30分後

「で、そのハンターの話をもとめると」

「矢一本でどんな飛竜でも一撃で仕留めるということか・・・」
「そういうこと」。まいいや、カオスに差し入れしてくるね」

ライムは話すだけ話してどこかに行ってしまう。

「奴は一撃で・・・か。とんでもない集中力があるんだろうな」
「一度会ってみたいな・・・砂塵さん、後で会いに行こうよ！」
二人はそのハンターに会うこと決意して、寝ました。

とある城

「お嬢様！お待ち下さい！」

「クリステイナ！待つんだ！」

貴族とメイドが走りながら大声で叫んでいます。

「うるさい！父上に何が分かる！私は行く！」

少女は手にした騎士剣で窓を二つに斬ると飛び降りていきました。

「・・・クリステイナ、何時まであいつの事を・・・」

牢屋

「カオス、出してくれよ」

「無駄だ、諦めろ」

マークの監視係でさえ嫌なカオスはひとりでクロスワードをやっています。

「オレ様にもそれくれよ」

「お前じゃバカすぎて解けない」

カオスはその後も散々話しかけられましたが全てスルーしました。

二時間後

カオスはマークがウザくなったので目の前に剣を突き立てました。

「ひとつ忠告しておく。俺はお前を殺す許可が出ている」
マークはおびえて後ろにいきました。

「はははっ、ヘタレだなあ、コイツはよお」
どこからともなくやってきたマックスがマークを見下して言いました。

「おっと、本題はカオスだ。任務だ。クリステイナ嬢が脱走したらしい。すぐに探しに行けだよ。ちなみに長官からマークに伝言だ。お前は早く逝けだと、はははっ！」
マックスはそう言ってカオスと出ていってしまいました。

「では、ギルドナイツ第14部隊作戦会議を行う」

14部隊隊長が搜索なのに作戦会議とかほざいている間にカオスとマックスは話をしていました。

「何故お前がここに？」

「ん？オレもギルドナイツになったぜ？」

カオスの疑問をいとも簡単に返すマックスはずっとハンマーを磨き続けていました。

「これにて作戦会議を終了する」
全く聞いていなかった二人は作戦がわからないので単独行動に出ました。

「そのお嬢様はここにいたんだよな。ハンターでもないのに何故密林に？」

「ここに水竜がいるらしい。だから手つとり早くそつち消そうぜ？」
マックスはハンマーをクルクルと回しながら河沿いに歩き始めました。

歩くこと数分。

「いたぜ、カオス」

マックスはハンマーを振り上げ、地面に叩きつけます。

すさまじい振動が起こり、飛竜が吼えたくらい大きな音が河を伝っていきました。

ガノトトスは河から飛び出してピチピチと跳ね始めました。

「後は任せろ、行くぞ、ダーク・ナイト・ブレイド！」

カオスは剣を横に振り、水竜を一刀両断しました。

二人は水竜が地面に伏した後、すぐに武器を背に固定して先に進みました。

「やるじゃねえか、お前も」

「俺なんかまだまだだよ」

そんな会話をしながら先に進むと2頭目の水竜を見つけました。

「さつきみたいにオレがあいつを叩き出す」

マックスはハンマーで水竜を叩き出すとすかさずカオスが斬りにいききました。

カオスが剣を振ろうとした瞬間。

「誰がいる！」

叫んですぐさまその人の護衛に回りました。

「気にせずに殺せよ！」

マックスはしかたなくガノトトスの腹を叩き、命を奪いました。

「大丈夫か？」

カオスが後ろを振り向くとそこには搜索以来の出ていた令嬢がいました。

それと同時に、カオスは驚きの声もあげていました。

「・・・何故ここにいる？」

「オレが昔助けたお嬢ちゃんがクリステイナ嬢だとはねえ」

「お久しぶりですカオスさん、それといつかのハンターさん」

カオスが見た者は以前共に過ごした友、テイナでした。

「テイナってのは愛称なんですよ」

ニコニコしながら微笑んでいました。

「まあ、生きててよかったよ。俺なんか生死をさまよったからな。

ちなみに俺は昔の恩人が助けてくれた」

一通り話し終わると帰路につくことにしました。

「クリステイナ、これをつけな」

マックスが兜を渡しました。

「この間狩ったアカムトルムの素材で作った。男用だが被れば誰かは分からないだろう」

マックスはそう言って先に馬車に乗りました。

街に戻るとマークが釈放されていました。

「10日経ってないよな・・・」

「このクソジジイ！もうこねえからな！」

マークは吼えています。

「死ねっ！」

マークは長官に吐き捨てるかオスたちの方にやってきました。

「ティナ！無事だったか、あいたかったぞ！」

マークが抱きつくと、ティナはニコニコしながら、かつ目は笑わずに腹にゴールドマロウを突き刺しました。

「触らないで下さい」

一応敬語を使っている点では褒めてやりたいところです。

ティナによって殺害されたマークはネコに運ばれていきました。

「感動の再会つてのに何故ティナは！」

マークは最近怒りっぱなしです。

ティナもマカオが悪い大人だと理解したのでしょうか。

ロリコンですからね、マークは。

マークは数日ぶりに狩りに出かけることにしました。

「オレ様の凶悪さ、再び思い知らせてやるぜ！」

復讐も兼ねて狩りにいきました。

「オレ様に刃向うな!!」

え、いきなり何!?

つて思った方に(恐らく全員)

回想

「強い飛竜、頼む」

「え〜」

受付嬢が嫌そうな顔をしてクエストを渡しました。

「ほらよ、轟竜」

マークが初めて自力で倒した飛竜の名が出てきました。

「は、オレ様をなめるな、すぐ終わらせてやるぜ!」

マークはすごい速さで雪山に行き、そこで会った轟竜は・・・

「2頭かよっ!!」

マークは2頭の轟竜に挟まれ、そのままグシャツと。

そして、現在キャンプで愚痴を言ってます。

ちなみにこれは30分続きました。

今回の雪山は完全封鎖らしいです。

「マジかよ・・・誰も助けに来ないじゃん」

マークはクエストの紙をグシャグシャにすると怒って雪山の頂上へと旅立って行きました。

「お、いい月が出てるじゃないか」

マークは今度は絶対月剣アブソリュート・カリンガが使えるのでニヤリと笑いました。

「さあ、はやくこいやあああああ！！！！！！」

マークは頂上で剣を掲げて叫び続けました。

2時間後

「はやくこいやあああああ！！！！！！」

とつくに制限時間を過ぎていますが、マークには関係ありません。マークは剣を構えたまま空ばかり見つめています。

その結果

「ぐはっ！」

横からティガレックスが横からかみついてきました。

「腹の肉がねえ!?!」

マークは半殺しにされて苦しんでいました。

「……っ!」

マークが「いたいよお」とかほざいている間に何かマークの横を通りすぎて行きました。

「ぐぎゃあ!!」

それと同時にティガレックスが息絶えました。

「は?」

マークは呆然としていました。

「……あと1」

どこからかそんな声が聞こえ、さらに新たな飛竜の気配が近づいてきました。

そして空から変な色の飛竜が落ちてきて、（あくまでも降りてきたのではありません。落ちてきたのです）

「ぎゃあああああ、まだオレ様に追い打ちをかけるか!?!」

「ぐぎゃあああ!!!!」

ものすごい奇声をあげてティガレックスが突っ込んできました。

「助けるよ……誰か……」

マークが死に物狂いで逃げていると矢が一本飛んできました。

「あぶねえ!?!」

「グギヤアアアア!!!!」

「なに!?!」

飛んで行った矢はティガレックスの頭に刺さっていました。

ついでに死んでいました。

「……マジかよ」

マークが前を向くと少女が立っていました。

弓を構えて。

「あいつヤバいだろ・・・地元のハンターかな？」

マークは少女に話しかけてみました。

「オッス、助かった。名前は？」

「・・・」

「シカトかよ・・・」

いくら話しかけても反応がないのではぎとって帰ることにしました。

「えっと、頭か・・・」

はぎとろうとした瞬間、ティガレックスの死骸に矢が刺さりました。

「・・・はぎとっちゃだめなの？」

「・・・うん」

少女の顔はポーカーフェイスだったのでやたらと不気味でした。

HUNTING 23 異常震域と2本の矢（後書き）

原作が尽きました。

一話が短かったので、3話つなげて投稿していたらこんなことに
・
・。

HUNTING 24 銀河と温泉

結局、マークのクエストは失敗に終わりました。彼女によって。

ついでに少女は名前を教える気配がありません。てか、一言も喋りません。

そんな気まずい状況下で村につきました。

「おお銀河よ、よく帰ってきた」

どうやら少女の名は銀河のようです。

「・・・」

銀河は無言で轟竜の頭を二つ渡すと立ち去っていきました。

「ところでお主の名は？」

「オレ様の名はマークだ！」

「マークか。お主は何をしに来たのかね？」

「獲物をあいつに取られちゃったからついてきた」

「諦めた方がいいぞ、お主はあの子には勝てん」

銀河はやはり強いようでした。

「あいつはオレ様の猟団にいれるしかない」

マークは何かの決意をしていました。

ちなみにマークは猟団を作っていません。

「おい、何やってんだ？」

後ろから誰かに話しかけられました。

振り向くと砂塵とシリウスが立っていました。

「また誰か狙ってるの？」

シリウスが言うとマークは指をさしました。

「あの銀河って子だ」

指の先には温泉に浸かっている銀河が。

「死ね」

砂塵とシリウスにタコ殴りされてくたばっていました。

「せっかくポケ村に来たんだから温泉に入ってくか」

「え、でも村長にほかの人の前では鎧脱ぐなって言われてるし・・・」

「固いこと言うなよ。いくぞ」

砂塵はシリウスをつれて温泉に入って行きました。

「ん・・・ここは？」

マークが顔をあげるとそこは絶景でした。

「銀河の生着替えじゃんw」

そう呟いた瞬間、肩に矢が刺さりました。

「・・・次は目」

弓を構えた銀河がマークを見ていました。

「まあ待て。オレ様は今目覚めたばかりで状況を理解していません
っ！」

目は免れましたが両肩が潰されました。

「・・・話、少し聞く」

HUNTING 25 裏(前書き)

裏話盛りだくさんです。

「それでオレ様はここで倒れてたわけだ」

マークは2時間かけて説明し、ようやく理解してもらえたと思いましたが。

しかし、終わった瞬間右足に激痛が走り、足を見てみると

「・・・おい」

矢が刺さっていました。

「why? why? why? why!?!」

そう言っただけに伏せました。

「お前が覗こうとしていたのは事実・・・」

マークは三カ所も射抜かれたので出血多量で猫に運ばれて行きました。

ちなみに最後の言葉は「お、白か」でした。

もちろんその瞬間左足に矢が刺さりましたが。

温泉内

「シリウス、早く来い」

「だって村長が・・・」

「もうここはココットじゃないんだから村長は関係ない」
「・・・でも」

村長の戒め（シリウス）vs 砂塵

こんな戦いが繰り広げられていました。

「体に傷でもあるのか？」

「わわわわっやめてよ!？」

砂塵が鎧を脱がし終わったときでした。

「・・・悪かった鎧を着ろ」

「・・・うん」

「着たらすぐにここを出る」

砂塵が服を着て刀を背に固定して言いました。

「村長に理由を聞かなければな」

ミナガルデ・ギルド

「オレ獵団つくるわ」

「・・・そういえば作ってなかったな」

マックスがいきなり言うてはいきなり申請しに行きました。

数分後

「おわったぜ！」

「そうか・・・で、メンバーは？」

「ここに書いてる」

カオスが渡された紙を見ると・・・

・マックス

・カオス

・砂塵

・シリウス

・ライム

・ティナ

「マークがいねえ・・・w」

「マークいらなくね？」

「まあ・・・そうだが俺たちが出会えたのはあいつのせいだしさ」

カオスが微妙にかばいます。

「書いてる途中気がついたけどマークだけカップリングがねえし」

確かに今までの傾向を見ると、

カオス ライム

砂塵 シリウス

マックス？

「おまえは誰とペアだよ」

「オレはお嬢様とだ」

「ティナが？ まさか」

しかし、番外編を見ると微妙につながりがありますが。

「マックスさん、お茶どうぞ」

「おう、ありがたい」

二人が仲良く喋っているところを見てカオスはいいました。

「マーク、無念だな」

HUNTING 25 裏(後書き)

何やらクオリティアップを図るとかで2ndGの発売日が延期になりました。

二週間も伸ばすのですからエスピナスを登場させるとか新モンスター登場させるとか色々やってほしいです。

HUNTING 26 村長の言い訳(前書き)

最後に裏話があります

HUNTING 26 村長の言い訳

マークはネコに運ばれた先で目を覚ましました。

「……ここは？」

「……集会所」

横に向くと銀河がいました。

「あのさ、銀河。オレ様と街に行かないか？」

「……拒否」

あっさり断られました。

「今より強い飛竜いるんだぜ！行こうぜ！」

「……私は戦いたいわけではない」

「こ、こいつ……」

マークはその後2時間説得を試みましたが無駄でした。

「仕方ねえ、最終手段だ！」

マークは額を地面に押し付け叫びました。

プライドを捨てながら……。

「仲間になってください」

「……初めからそう言えばいい」

銀河は弓を背負うと立ち上がりました。

「どこ行くんだ？」

「……街」

それを聞いた瞬間、マークの顔は急に明るくなり軽快なステップで歩いて行きました。

ココット村

「おお、シリウス！一体どこに行っていたのだ！？」

「貴様が村長か？」

砂塵は目を細めて村長を見ました。

「なななななんじゃおぬしは！？」

村長は砂塵の冷たい視線に脅えがはいつています。

「申し遅れた。我が名は砂塵と申す。いきなりだが一つ言わせてもらおう」

砂塵の声に村中の人々が集まってきました。

「シリウスが女ってのはどういうことだ？」

「え？何言ってるの？ボクは男だよ？」

砂塵の言葉にシリウスが驚いたように訂正します。

「・・・ワシの親族には一人も男が生まれなかった。だからシリウスを男として育てた」

「・・・女としてもよかったのでは？」

「女だどうせ村長継がんじゃない？」

「・・・それはあるかもしれないが」

その後村長はシリウス全てを打ち明けました。

ない
」

数日後

街に戻ったマークは驚きました。

「お前ら獵団作っただんな！」

「ああ、その子はまたお前が連れてきたのか。じゃあ、登録してお
くよ」

カオスが走ってリストを追加に行きました。

「さて銀河、部屋に行ってみるか」

「・・・」

部屋の前

部屋の前にはマックスが立っていました。

「お、マークか。その子がその新入りだな」

「・・・銀河」

銀河はひどく短い自己紹介を終えると部屋に入って行きました。
マックスは笑いながら「短けえ・・・」と言っていました。

「さあて、オレ様も部屋に入るとするか」

マークが入ろうとするとマックスが止めました。

「ここに入っているのはメンバーだけだ」

「何言っただよ。入るぞ」

「メンバーしか入れねえんだよ」
マックスがしつこく止めるのでマークは一つの可能性を考え、メンバーリストを見ました。

・マックス（団長）

・カオス

・銀河

・砂塵

・シリウス

・ティナ

・ライム

団長を除き、50音順

「・・・オレ様の名前がない」

「おい、マックス。俺の知り合いが獵団入りしたいんだと。入れてもいいか？」

「お前の友達ならいいぞ」
遠くでカオスたちが話をしていますがマークの耳には入っていません。

「マーク、久しぶりだな」

絶望的な顔をしていたマークに何者かが話しかけてきました。
マークが顔をあげるとそこにはウエンがいました。

そこに追い打ちをかける話が。

「俺とライザ姐さんもカオスたちの獵団に入った。お前も入ってい

るのだろっ？なにはともあねよろしく」

マークはその瞬間ナイフで首を切るつもりでしたがウェンの手によって阻止されました。

メンバー（最新版）

- ・ マックス（団長）
 - ・ ウェン
 - ・ カオス
 - ・ 銀河
 - ・ 砂塵
 - ・ シリウス
 - ・ ティナ
 - ・ ライザ
 - ・ ライム
- 団長を除き、50音順

HUNTING 28 狩りの足跡(前書き)

前作の回想的なものです。

「……………暇すぎる」

マークはベッドの上で転がっていました。

「……………誰も猟団入れてくれないし」

マークはやることがないのでアイテムボックスをあさり始めました。すると思い出の品の数々が。

「これは…………初めて倒したランポスの皮…………」

回想

ランポスは3頭。

オレ様はハンター・カリंगाを強く握りしめて、オレ様は吼えながら突撃。

それから「キエエエエエエ！！」とオレ様はは勇敢に、叫び声をあげながらランポスを縦に一閃したけどランポスにその攻撃をバックステップで避けられて。

それから勢いあまって剣が地面に刺さって。

ランポスが後ろからかみついたり、引っかいてきたりして。

拳句の果てオレ様は肩を引き裂かれて、腹にかみつかれて、最後に肉を抉られて。

今思うと懐かしい思い出だ。

「・・・頭にくる思い出だ。このあと山菜ジジイに・・・これは初めて倒したティガレックスの頭殻か」

回想

その日の雪山はいつもと雰囲気が違つて。

ポポがいなくて。

ポポを探していると後ろから何かが落ちてくる音がして後ろを振り向くと、後ろにいたのは轟竜ティガレックスがいたんだよな。

轟竜はマークにすさまじい勢いで突進してきたんだつた。

で、10分程度逃げ続けたところでレックスの牙が壁に刺ささつたのが勝利の鍵だつた。

オレ様はチャンスと思ひ、反撃してとりあえず耳と目を潰して。

それからところどころ突き刺し、いたぶつて殺したんだよな。

「カッコよすぎたぜ、あのときのオレ様・・・これはウエンの仇打ちした時の蟹の爪か」

回想

オレ様はいきなり首切られたんだよな。

つてか猫の医療技術やばすぎだろ。
それで頑張つて爪を切り落として、今度は胴体を両断された。
それでさっき切り落とした爪を担いで、今は亡きライトニング・ペ
インで止めを刺した。
と、思いきやまだ生きててそれでこの爪が刺さって決着がついたん
だったな。

「・・・あれからウエンはそこその礼しかなかったし・・・こ
のヒレはヴォルガノスをみんなで倒した時のか」

回想

あの時はグラビモスも一緒にいたんだよな。
vs 飛竜&魚竜はオレ様でもかなり苦戦した。
溶岩へのダイブも経験したし、ソウルたちとの連携狩猟で何とか頑
張ったけど敵は強すぎた。
悔しいがウエンがここで来てなんとか討伐で来たんだよな。
あいつの武器・・・伝説の黒龍の武器だったような・・・。

「あいつらを狩るなんて・・・我ながら強すぎた・・・オレ様が」

その後も探していくと一通の手紙を見つけました。

バカマークへ

私は貴様にいつも置いていかれるので旅に出ます。

私は古龍だからこの先生きていけるけどあんたはどうせすぐ死ぬだろうからこの本あげる。

昔あげた私の素材の使い方が書かれてる。

ちゃんとした使い方しなさいよ。

血龍

「あいつの存在忘れてた………」

こんなことを言っておきながら本を手にしました。

「……これは………」

HUNTING 29 神話(前書き)

なんか凄まじくモンハン離れしているし、ギャグも消えた・・・。
この小説らしくない・・・。

「凄いぞ・・・凄すぎる!」

マークの手の中にある本にはこう記されていました。

> 血龍の甲殻はあらゆる竜の甲殻と結合し、神の力を得るく
そしてそこにはその作り方も記載されていました。

例えば

・ディアブロシリーズ + 血龍素材 || オーディンシリーズ
・レイアシリーズ + 血龍素材 || ワルキューレシリーズ
・レウスシリーズ + 血龍素材 || イカロスシリーズ
・レックスシリーズ + 血龍素材 || アキレウスシリーズ

「オレ様は・・・魔物や神々の力を手に入れることができる!」
アイテムボックスの中には大量の血龍素材が入っていたのですべて
作れそうな勢いでした。

その頃猟団室では

「カオス! 大変だっ!」

「シリウスじゃないか。珍しい」

シリウスがもの凄く焦りながらカオスの元に訪れていました。息を整えてから言いました。

「街にミラボレアスがきた!!！」

ミラボレアスが空にいるらしく、もしかしたら街が襲われるそうです。

「黒龍は伝説だろ？いるわけ・・・」

「いる。黒龍は存在する」

後ろからウエンがやってきて言いました。

「これを見ても伝記に残る想像上の龍と言えるか？」

差し出された物はウエンの双剣・双龍剣【天地】でした。

「こちらは蒼い老山龍の剣だ。そしてこちらは、黒龍の剣。それも怒れる紅き黒龍の剣だ」

差し出された剣を見てカオスは青ざめました。

この男・・・何者だ・・・と。

「外が騒がしいな・・・あれは・・・まさか伝説の黒龍!？」

マークは興奮して外に出ました。

「来てるぜ！すぐにオレ様のペットにしてやるよ!!！」

マークは体に以前砂塵が狩ったガルルガの素材でいつの間にか作った鎧を纏い始めました。

本を読み進めていくうちに飛竜の鎧から取り外し可能ということに気づき、早速装着しました。

そして血龍の甲殻を装着し・・・。

「完成。ホルスシリーズ！」

「さあ、あの空の黒龍を狩りにいくぞ!!」
マークは異様な色の空を駆けて行きました。
「マナカリと血龍の力、見せてやるぜ!!」

HUNTING 29 神話(後書き)

イカロスって神じゃなかったような・・・。
ってかウィキペディア抜粋って使っているのかな・・・。

HUNTING 30 ツバサ(前書き)

もう完璧にモンハン離れしてます

マークがどのような力を使ったのか空を飛んで行ったあと、民衆は騒ぎ始めました。

「なんだあの翼の生えた人は!？」

「鳥人か？まさか・・・ありえない」

「あの剣はギルドの奴じゃなかったか？」

と、いろんな声が上がります。

「ねえ、カオス」

「どうしたシリウス」

「あれってマークだよ」

「マリシヤス・ナイト・カリングもってるから」

「でもさ、どうやって飛んでるのかな？」

「俺に聞くな」

部屋の中でもマークに関しての話が繰り広げられていました。

「ウエン・・・私達も行くか」

「そうだな・・・姐さん」

ウエンと大分出番のなかったライザが剣を持って走って行きました。

「マーク・・・我が死刻夜刀もあいつを斬りたいようだ。今、参る」

街の外で黒龍を眺めていた砂塵も走って行きました。

「・・・山にはいない龍」

銀河は黒龍を眺めながら紅茶を飲んで椅子に座っていました。

「・・・私が行くまでもない・・・ここにはたくさん強いハンターたちがいるんだから」

「オレの出番か。待ってる、お前の仇討ってやるからな・・・行くぞ、お嬢様！」

「あ、はいマックスさん！」
ティナとマックスは二人並んで黒龍を目指しました。

「ねえ、カオス。みんな黒龍討伐に出かけて行ったけど・・・」

「あ・・・まあいい、ライム、シリウス、俺達も急ぐぞ!!」

「ふっ、あいつらも来たか。それじゃ、オレ様たちで地獄を見せてやるよ!!」

マークは剣を気色悪い色のかざし、僅かに入る月光を剣に当てました。

「行くぜ・・・アブソリュート・カリングガ!!」

剣は蒼白く光って力を解き放ちました。

そして、マークは血龍の甲殻を剣に装着。

「まだまだ・・・カリング・フュージョン!!」

蒼白く光り輝く剣に紅き甲殻が合わさったことで・・・。

「出でよ、ソラス・カリング!」

剣が完成したことで閃光玉以上の閃光が解放たれ、
邪悪な色の空を
白一色に変えました。
ですが・・・。

「ぎゃあああああ、目があ、目があ」

やはりマークは馬鹿でした。

地上では

「あいつ、どうやって飛んでるんだ？」

「あ、落ちてきた」

マークが自滅したところをみんなが眺めながら飛ぶ原理を一生懸命考えていました。

マークが墜落した頃、いつものメンバーはマークの周りに集まっていた。

「これは・・・以前我が刀の錆にした黒狼鳥の鎧？」

「それにこれは血龍の甲殻・・・」

それぞれの記憶にある物をマークが所持していたことで皆、多少の驚きがありました。

そしてあの本をカオスが手にしたとき、黒龍ではない邪悪な気配が近づいてきました。

「これは・・・奴だな」

「ミラバルカンね、間違いなく・・・でも何故火口付近に生息する紅龍が？」

ウエンとライザは見たことがあるらしく、溶岩の色をした邪龍にさほど驚いてはいませんでした。

その場の全員が黒龍と紅龍の翼を眺めている中、カオスだけは本を読んでいた。

「・・・仕方無い。マックス、以前お前が作った覇竜装備借りるぞ」

「いいが・・・何に使うんだ？」

カオスはアカムトルムの鎧を着込み、血龍の甲殻と結合させ始めました。

「・・・完成。ケイオスシリーズ、またの名をカオスシリーズ」

「カオスならやつてくれるさ・・・きつと」

「あまり使いたくはなかったんだがな、こんなときだ。仕方ない」
カオスは剣を握ると何やら鍵らしき物を開けました。

「リミット・ブレイク」

鍵穴らしきところから線が一本入り、割れました。
対になるその剣は妖しい光を解き放っています。

「・・・何をしに来たかは知らないが、立ち去った方が身のためだ。
黒龍ども」

言葉を聞き取れたのか二頭の黒龍は空からカオスを見下ろしました。

「・・・刃向うか・・・それもいい、エクセリオン・セイバー！」

カオスの謎めいた力により、長い双剣が蒼く輝きはじめました。

辺りが輝きになじんできた頃にカオスは言いました。

「お前らは、もう俺には勝てない」

HUNTING 32 混沌の神 く裁き

確かにカオスは宣言通り黒龍たちには負けませんでした。
綺麗に角、眼も破壊し、さらに胸殻も綺麗に粉碎し、後は消すだけ
でした。

そして、カオスが止めを刺そうとしたときに事件は起こりました。

回想

「止めておけばよかったものの、くらえっ!!」
1 vs 2 にも関わらず、カオスははずば抜けた強さでミラボレアスの
角を砕き、

「次はお前だつ!!!」

さらにミラバルカンの眼も抉り出しました。

「……こうなってもまだ来るか。黒龍は全て性質たむが悪いのか……
ウエン、実際そうか？」

「……悪い、俺達はそこまで余裕がなかった……」

それでもなお、黒龍の牙はカオスに襲い掛かります。

「……止めにしてやる」

カオスの声に流石の黒龍も畏怖の念を感じたのか、若干怯えます。
そして、カオスが剣を振り上げた瞬間……。

「あああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!オレ様の血龍の甲殻よくも使いやがったな、カオスめ!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

かなりの大音量がその場全員の耳に突き刺さります。
そして、

「とつとと返せよこの野郎！！！！」

いつの間にかカオスの後ろにいたマークがカオスの鎧を脱がしにかかります。

こいつの非行がカオスから勝利を奪いました。

カオスは襲いかかるマークを振り払っている間に、一対の龍は人の届かぬ地に逃げて行きました。

「・・・何やってんだこのクズは」
×ミナガルデの住民の数

回想終了

そしてここは獵団部屋

「死ねこのポンコツ」

「マークさんはやはりクズだったんですね・・・」

「見損なつた・・・最初からだか・・・」

「これはマークくんが悪いね。私はフォローできないよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・お前はハンターに向いてない」

「マーク、お前は妨害しなくてもカリングができれば邪魔にならなかつたろうに」

「ドンマイドンマイ、誰にだってミスはあるさ・・・でもあのタイミングではいくらボクでもあんなことしないよ・・・」

「次は気をつけて。今回は逃げて行ったけど、逃げなかつたらあなたとカオスの命はなかつたかもしれないんだから」

その後もマークは団員全員から文句を言われ続けました。

そんな中、一人だけ責めなかつた人がいました。

マークが追放されて街の外の草むらで横たわっていた時、その人は話しかけてきました。

「マーク、助かった。あの甲殻がなければ俺は黒龍相手にあそこまで戦えなかったはずだ」

カオスだけは礼を言ってマークの隣に座りました。

「オレ様がお前の邪魔をしたから止めさせなかったのに・・・か？」

「ああ、そもそもあれは殺したくなかったんだ・・・」

カオスは何やら言い始めました。

「あいつらの眼に・・・殺意がこもってなかったんだ」

HUNTING 33 魔眼の究極龍（前書き）

タイトルが青眼の究・・・のパクリの時点でどんな敵が出てくるか
お分かりでしょう。

「バカか、モンスターはみんな殺意があるんだよ！」

「バカはお前だ。アプトノスは殺意持ってねえだろ！」
なんか、喧嘩になりました。

「何を言う！オレ様はアプトノスに殺されたことがあんだよ！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カオスは失笑しました。

「本題に戻る。奴らは何かから逃げてきたようだった」

「黒龍が逃げる？ああ、オレ様の強さに怖気づいたか！」
それは絶対にはずす。

「マーク。これは警告だ。お前はミナガルデを去れ。奴らの始末は俺がする。殺意はなかったが確実に現況があるはず。それを叩く」
マークはカオスの言い方が気に入りませんでした。

「それって、オレ様がいらないうつてことかよ！？」

「そういうことになるな・・・ただ、血龍の甲殻は貸せ」

「オレ様の家宝に触るな！！」

面倒なので以下、究極龍とします。

「カオス・・・あれはオレ様の力がないと勝てねえぜ！」
「血龍の甲殻だけあれば充分勝てるが・・・行きたいならついてこ
い」

マークは剣を抜いて防具に甲殻を装着、そして余りをカオスに。

「ホルス！」
「カオス！」
「完成！！」

空はマーク、陸はカオス。

「行くぜ、マーク」

「オレ様と一緒にんだから大船に乗ったつもりで戦えよ!!」

そして、マークとカオスは究極龍に向かっていきました。

HUNTING 34 究極龍の根城

あれから3カ月。

究極龍の討伐は未だに続いています。

戦っては逃げ、回復し、再び戦う。

それが延々と繰り返されていました。

「カオスたちもそろそろ限界だ・・・そこで我らが立ち上がるべきではないかと思った」

砂塵は猟団室でそう叫びました。

「オレも黙って見ているのは、気に食わん。その意見賛成だ」
マックスはそれに賛成、そして皆も同意見のようでした。

シリウス エンプレス ヴィーナス
銀河 ドドブラ フェンリル
ライム ヒプノック シムルグ

「なかなかにあってるな」

不意に後ろから声が聞こえて振り向くとそこにはマークとカオスがいました。

「オレ様はまだまだいけるぜ」

「ふ、クズのくせにな・・・おい、お前ら。集合！」
マークスは全員を集め、作戦会議を始めました。

未開の土地

「カオス、オレ様とお前は切り込み隊長なんだからしっかりやれよ」
「お前に言われたくはない」

正面

マーク

カオス

「カオス級のハンターが3人だから余裕だろう」

「女どもには楽しませてやらねえとな!」

「ここで弱らせきる」

中央

ウエン

マックス

砂塵

「さあ、気合い入れていこう。ね!」

「私はガンナーではないのであなたに少し頼ります」

右サイド

シリウス

ティナ

「ウエンには少し頑張ってもらってるから・・・あたしも頑張ろう」
「!」

「倒せるかな・・・」

「・・」

・・・消す」

左サイド

ライザ

ライム

銀河

作戦会議で決めたポジションのまま先に進み、そこであの龍を発見しました。

「今度こそ、仕留めてやるぜ!!」

マークは今、人生で最大の強敵に立ち向かっていきました。

LAST HUNTING マークの死(前書き)

完結です。

LAST HUNTING マークの死

「流石のオレ様でも・・・こいつにはてこずった・・・」

マークは空を舞う究極龍と面と向かいました。

「最近作者の最も嫌いな奴がベースにされてるって理由でオレ様は全然出番がなかったんだ!!」

裏話を叫びながら剣を振りかざしました。

「死ねえい、この変則野郎!」

空中の攻防戦が激しく続きます。

中央エリア

「暇だ」

「同感」

「オレがいった方がよかつたんじゃない?」

「ま、マークの我儘は通すまで続くからな。あいつ来年30なのにガキみたいなこと言いやがって」

「我らの平均年齢（マークを除く）は19歳程度なのにか!？」

「少しあいつヤバいぞ・・・」

なんかマークの年齢で盛り上がっていました。
ちなみに

マーク	29
カオス	21
ティナ	15
ウエン	19
ライザ	22
砂塵	23
シリウス	18
ライム	20
マックス	24
銀河	16

一方両サイドでは

双方からシリウスと銀河が狙撃していました。

「.....急所に当たってるのに死なない」

「まあ、それだけ奴は強いんですよ」

「ティナくあきたく」
「私が代わりましょうか？ただその場合、ボウガンが壊れる危険性がありますので……」
「……やっぱいい」

陸地

「マークが落ちてくれりゃあ後は俺が殺すんだが……」

その瞬間

マークは右の翼膜を十字に切り裂き、落ちてきました。

「お、久々にマークが役に立った」

が、しかし

「なっ!？」

墜落寸前で体制を立て直し、片翼飛行を開始し始めました。もう、普通の生き物では無理です。

カオスは武器を展開させ、残った二つの首を切り落としました。

一週間後

「マークが死ぬなんて・・・」

「ちょ、マジ死にかよw」

団長とマーク曰く親友はマークの墓を見つけていました。

「カオス、行こうぜ。何時まで経ってもそのままじゃ来月の結婚式はいいものにならないぞ」

「・・・俺は結婚を止めたよ・・・」

「は？」

「ライムキャラ薄いからどうせ次回作には出ないし」
カオスは俯いた顔で言いました。

「それに許婚だからどうでもいいことに気がついた」
マックスはカオスの変わりように声が出ませんでした。

LAST HUNTING マークの死(後書き)

途中でテーマを見失いましたw
夜から神になってるしw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2102d/>

マーク狩獵記 G

2010年10月11日22時58分発行